1

次の――線部の漢字をひらがなに、またカタカナを漢字に直しなさい。

A 資料を複写する。
B 軽快に歩き出す。
C 円満具足の日々を送る。
D 昨日を境に涼しくなった。
E おにぎりを俵型ににぎる。
F 身のケッパクを証明する。
G 行いをハンセイする。
H カチョウフウゲツを題材に詩を書く。
I 周りの人をササえる。
J セーターをアむ。

2

次の□に当てはまる漢字一字を例にならって考え、記しなさい。

例　岡→□→脈　　答：「山」
登 → □ → 吹

A
本→□→楽
物 → □ → 色

B
今→□→中
深 → □ → 長

C
鼻→□→筋
輸 → □ → 圧

D
古→□→度
首 → □ → 合

E
目→□→刷
矢 → □ → 象

3 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分を理解すると幸せの扉が開く。
お腹が空いた時に冷蔵庫に首を突っ込めばいいものを、タンスに首を突っ込むようなことをする人が多い。ネクタイを食べてもお腹はふくれないのに、それで文句をいっている。
入れ歯なのに堅い煎餅を食べてしまうような生き方をして、人生は辛いと歎いている人がいる。

人は、心理的にいえば安全第一で、傷つくことを避ける。傷つくことから逃げる。
普通の人は安全第一で、成長欲求と退行欲求[注1]の葛藤[注2]で退行欲求を選択する。
別れた方が幸せになれる相手とも別れない。
ことに劣等感の強い人は、どうしたら傷つかないかということばかりを考えていて、自己実現の心の姿勢がない。成長欲求を選択しない。
A その結果、自分の能力を使う喜びの体験がない。格好をつけてしまうことで息苦しくなる。
道を間違えた時に大人に聞けばよいものを、赤ん坊に聞く人がいる。その方が恥ずかしくなくて聞きやすいからである。
人から拒絶されることを恐れて自己主張できない。まさに勇気の欠如である。
拒絶されることを恐れながらも自己主張するのが勇気である。その苦しみが成長と救済に通じることである。
一人前の義務と責任を果たすことが苦しみであり、その苦しみが成長と救済に通じる。

ただここで考えるべきことは、「人から拒絶されることがそんなに恐ろしいことか」ということを、もう一度立ち止まって考えてみることである。
そんなに恐ろしいことではないのに、恐ろしいと自分が一人で勝手に感じている場合も多い。
B このように正しい現実認識をすることも勇気であり、心のゆとりである。
そうして現実から逃げているうちに自分が誰であるか分からなくなる。自分が本当に欲しいものが分からなくなる。いつまで経っても自分自身の人生の目的が分からない。

コロンブスは、安全に背を向けて西へ向かって船出した。そしてアメリカを発見した。

もちろん無謀にではなく、計画を練りに練り、自らの実力を磨いて、磨いての話である。

コロンブス自身が、「可能な限り全ての種類の勉強をした」と書いている。「地理の勉強、歴史の勉強から哲学の勉強まで」。
私の注意を引いたのは、哲学を勉強したということである。
彼はインドに行きたいと思っていたのだから、地理の勉強、歴史等の勉強をするということは常識で理解出来る。
だが、哲学となると話は別である。
コロンブスが哲学を学んだということから、彼は「人間がいかに生きるべきか」ということを考えていた人だったのではないかと私は推測している。
当時の船乗りは皆、東へ向けて船を走らせた。［ X ］、コロンブスは「西へ行こう」といった。
彼が「西へ行こう」と決意したことには、地理や歴史や航海記録の勉強に加えて、「私はこうして生きるのだ」という彼の人生哲学があらわれているのではないかと私は思っている。
彼のこの「西へ行こう」という決意こそが、人類の歴史上の大きな「パラダイムシフト」[注3]だった。航海の常識をぬりかえ、それによって歴史が変わったことを、現在の私たちは知っている。
コロンブスは大学で学んでいない。［ Y ］、高等教育を受けていない。しかし彼は、自分が生きるために必要なものは身につけた。学歴は人を救わないが、学問は人を救う。
コロンブスが安全第一であれば、安全に背を向けて西へ向かって船出しない。
コロンブスの話をすると、あまりにも私たちの日常生活とかけ離れていて、自分の人生の参考にはならないと思うかもしれない。
しかし誰にでもその人の中に「その人自身のコロンブス」はいる。あのコロンブスだって、自らを奮い立たせることなく、何も感じないで日常生活のままで、安全に背を向けて西へ向かって船出したわけではない。
C 自己実現しながら生きる時には、誰もがコロンブスなのである。
安全第一だけでは、自分の「実りある人生の航海」には出帆出来ない。

（加藤諦三「ブレない心のつくり方」による）

（注1）「退行欲求」……楽をしたい、甘えたいという欲求のこと。
（注2）「葛藤」……心の中に複数の逆の感情が存在し、どちらを取るか迷うこと。
（注3）「パラダイムシフト」……その時代や分野において当たり前であった見方や考え方が、大きく変わること。

問1　本文中にある［　X　］・［　Y　］に当てはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①　たとえば　　②　あるいは　　③　しかし　　④　さて　　⑤　なぜなら　　⑥　つまり

問2　――線部A「その結果」とありますが、どのようなことをした結果ですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

①　退行欲求を選択した結果。
②　成長欲求と退行欲求とで葛藤した結果。
③　劣等感が強くなった結果。
④　人生は辛いと嘆いた結果。

問3　――線部B「このように正しい現実認識をすること」とはどういうことですか。五五字以上、六〇字以内で説明しなさい。（句読点は一字とします。）

問4　――線部C「自己実現しながら生きる時には、誰もがコロンブスなのである」とはどういうことですか。それについて本文全体を踏まえて説明した次の記述の［　Ⅰ　］と［　Ⅲ　］に当てはまる言葉を本文中から抜き出して埋め、説明を完成させなさい。なお、空欄内の数字は字数を表しています。（句読点は一字とします。）

自分を正しく理解し、［　Ⅰ　八字　］ことに喜びを感じながら成長して生きていくときには、コロンブスのように、［　Ⅱ　十字　］を考え、それを実現するために必要な実力を身につけて、自分が［　Ⅲ　五字　］を恐れずに行動するべきだということ。

問5　本文の内容として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

①　自分自身が求めているものを得る方法や、自分自身の特性など、自分への理解を高めることが幸せへの道につながっている。
②　普通、人は安全第一をモットーに生きるものであるから、勇気がなくて自己主張しないという苦しみは、成長や救済となる。
③　コロンブスは、通常ならば船乗りが学ぶべき地理や歴史、航海記録の勉強を軽んじて、哲学を学ぶことだけを重要視した。
④　コロンブスは、必要なことを学んだうえで、危険性がなく安全であるという確信を得てから、西へ向かい航海に挑戦した。
⑤　コロンブスによる西への航海は、人類の歴史の中で大きな分かれ目となり、その後の人々の航海にも大きな影響をあたえた。

4

次は、東 直子『ひとつこひとり』の一節である。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大悟は、少し醒めたところのある、勉強好きな人間に育っていった。中学生になると孤独癖と勉強好きがますます助長され、一人でものを覚える時間を何より愛するようになった。特に英単語を覚えることは好きだった。一語でも多く単語を覚えれば、それだけ有利になる。身につければつけるほど「己から離れず、身を助ける」。おじいちゃんの言った通りだ。どんどんどんどん、覚えればいいんだ。そうだ、辞書を丸ごと覚えちゃえばいいんじゃないか、と自分独自の攻略法を見出し、邁進していたのだった。

英語の辞書を一ページ目から順にすべて覚える。そのために、学校から家に帰るまでに、最低でも五つ、英単語を覚える、ということを自分のノルマにしていた。部活動には参加せず、特別な友達は作らず、一人で登下校し、たいてい一人で行動していた。おじいちゃんの「人は裏切る」という持論が、幼い心に強く作用しすぎてしまったせいなのかもしれない。しかし、勉強がよくでき、物をよく知っているというだけで、同級生から一目置かれ、いじめられたりからかわれたりするような苦痛は受けずに済んでいた。おじいちゃんの予言通り、A身につけたものによってすでに助けられていたのだ。

泣きながら学校から帰ったあの日、仲のよかった友達も一緒になって自分のことをさんざんからかってきた。大悟にとってはすでにとても遠い出来事であった。大きな声を出して小競り合いをしながら通りすぎていった小学生たちに、おじいちゃんの言葉を教えてやりたいような気持ちにもなった。

小学生がすっかり見えなくなってから、大悟はため息を一つ吐いた。ふたたび英語の辞書を開くと、そこに書かれている英単語と日本語の意味、そしてその単語を使った例文を、一行一行、自分の脳に刻みつけるようにつぶやいた。それからおもむろに目を閉じて、今つぶやいた英単語とその意味を、記憶の海底から浮上させる。うまく浮上しなかったら、目を開いて辞書を読んでつぶやき、また目を閉じて、記憶の浮上を確かめる。それを何度も繰り返し、記憶が定着したと思ったら、次に進んだ。

「何してるの？」

ふいに声が聞こえて、大悟は閉じていた目を見開いた。目の前に、顔。

うわ、と声を上げて驚き、思わずのけぞった。自分と同じ中学校の制服を着た少年だった。しかし、初めて見る顔だった。濃紺の制服を着た細長い身体が逆光を浴び、公園の樹木の一本がふいに近づいて話しかけてきたようだった。

「何してるって……英単語、覚えてる……」

「こんなとこで？　すげえな」

「いや、別に……」

「しかもそれ、単語帳とかじゃなくて、辞書じゃん」

「そうだけど」

「辞書から直接覚えてんの？　もしかして最初から全部覚えようとしてんの？」

「まあ、そう、だけど……」

「うわ、すげえ、辞書、全部？」

「そのつもりだけど」

「なんで単語帳とかで覚えないの？　試験に出ないようなやつとか必要なくない？」

「僕はそういう、目先のことだけ考えてるわけじゃないから。長い時間

をかけて身につけようと思ってるんだから」

「へえ」

「単語帳は点だけど、辞書なら面だから」

「どういうこと？」

「単語帳とかだと、その単語以外は読まないよね？　そこだけ覚えるから、点。でも辞書は、そのページ全部が目に入ってくるから」

「あー、覚えようとする言葉のまわりも目に入るってことか」

「そういうこと。例文を読むと、その言葉の使い方がわかって、会話してる場面が浮かぶだろ。その場面ごと、物語の一場面みたいに覚えるんだよ」

「なるほど、頭いいー。やっぱすげえよ、ほんと、すげえよ」

「まあ、それほどでも……」

突然話しかけられて戸惑っていた大悟だが、これだけたっぷりと「すげえよ」を浴びせられて褒められると、悪い気はしなかった。

最初の方に覚えた英単語「aboard」を使った「All aboard!」という例文が、なぜだか頭に浮かんできた。「皆さんお乗り下さい！」あるいは「発車オーライ！」という意味である。大悟の頭の中では、バスに人々が次々に乗り込んでいく姿が映像として流れていた。

「やっぱほんと、天才だよ、大悟は」

「え？」

（なんでこいつが、僕の名前を知っているんだ？）

「えっ、て。あれ、おれのこと、覚えてるよね？」

少年は、当たり前のように言った。大悟は、その、さも当然のような表情に見覚えがあるような気もしてきた。何しろ自分の名前を知っているんだから、どこかで一緒になったってことなんだろう。

「あ、ああ、それは、もちろん、覚えてるよ……」

「Bよかったあ！」

少年は、両手を上げて大袈裟に喜んだ。こんなに喜んでもらったのでは、ますます知らないとは言い出せなくなり、何が何でも思い出さないといけないぞ、と大悟は焦った。

「おれ、大悟に忘れられてたらどうしようと思ってたよ。ほんとよかった」

「う、うん」

大悟は、作り笑いを浮かべながら、さらに記憶の海を探った。さっき覚えたばかりの英単語は記憶の波間にぷかぷかと浮かび上がってきたが、今目の前にいる少年の顔は、全く浮かび上がってこなかった。

「大悟さあ、もしかしていつもここ来てる？」

「いつもっていうか……、家に帰る途中だから」

「やっぱそっかー。実はさ、前もこの公園通りすぎたとき、あれえ大悟かな、って思ったんだけどさ、なんか、話しかけるなって感じのオーラ出してたし、おれも自転車乗ってたから、通りすぎちゃったんだよね」

「Cへえ……」

大悟はそれ以上の言葉が見つからなかった。

二人ともしばらく黙り込み、気まずい空気が流れた。

「大悟ってさあ、帰宅部だよね」

ふいに少年が口を開いた。

「え、まあ、そうだね、部活は入ってないから……」

唐突な質問に、少し困惑しながら大悟は答えた。

「おれも、帰宅部じゃん？」

「え、ああ、そうだよな……」

大悟は、そんなこと知らないよ、と内心では思いつつ、話を合わせて頷いた。すると少年の表情がぱっと明るくなった。スイッチが入ったよ

うにさっと立ち上がって移動し、ブランコに乗ると、勢いよく漕ぎ始めた。大悟もつられて立ち上がり、ブランコを漕ぐ少年をぽかんと眺めた。
「だったらさあー、一緒に活動しようよー」
「活動？」
「あ、もうしてる感じかなあー、これ」
「これ？」
「帰宅部の活動だよ！」
少年は叫ぶようにそう言うと、ブランコからぱっと飛び降りた。うわ、と大悟が思わず声を出した直後、少年がばさりと地上に降りた。いや、降りたというより、落ちた。
「……ってえ……」
地面にうずくまる少年に、大悟はすぐに駆け寄った。
「大丈夫？」
少年は顔をしかめたまま大悟の方に向き直り、いきなり a破顔した。
「いつ、活動する？」
「活動？」
「活動計画、活動内容、一応決めないとな、帰宅部だって」
「帰宅部の、計画？」
「そう、予定合わせるからさ」
少年は、生徒手帳を取り出した。そんなものでスケジュール管理してるのか、と思いつつ、その表紙に氏名が記載されていることに大悟は気づいた。顔を動かしてそれを確かめようとした大悟の目の前に、はい、とその表紙が差し出された。「斉木雅也」とあった。
「おれの名前、斉木雅也」
「あ、ああ、ちょっと、その、下の名前、なんだったかなあって」
笑ってごまかそうとしたが、雅也と名乗った少年は真顔のままだった。
「知ってた」
「は？」
「大悟が、おれのこと覚えてないって、知ってた」
そう言って、かざしていた生徒手帳を下げた。
「なんだよ、それ……」
身体の力が抜けていくのを感じた。
「大悟が、おれのことなんか覚えてるわけないって、わかってた。でも、おれは大悟のこと、知ってる。あこがれだったから」
「え、なんで？」
「大悟は、成績いいから。帰宅部なのに」
確かに大悟は自主的な学習が実を結んで、学年でも上位をキープしていた。勉強をしっかりしたいから部活動には入らなかった、という、大悟が口にしたこともない理由が b流布していることも、大悟はうすうす知っていた。
「いつも堂々としてて、すげえなって思ってた。おれ、ほんとに、なんもないからさ。なんか、一人でコソコソ帰るだけだったけど、大悟は、部活してなくても背筋のばして帰宅して、こうやって堂々と公園で勉強もしてる。すごいよ。実はさ、前もここで話しかけたんだよ」
「ほんと？」
記憶をたどってみたが、大悟は何も思い出せなかった。
「話しかけたのに、ほとんど無視された」
「ああ、ごめん、たぶん、勉強に没頭してたんだと思う。悪かった」
「別にいいよ。それも、かっけえなあ、って思うからさ。人の目なんかぜんっぜん気にせず、ガリ勉できるってさ」
「ガリ勉って……。なんか、僕のこと、ほんとはバカにしてる？」
大悟が少し低い声で言うと、雅也は急にふにゃふにゃと身体をゆらした。

「してねえって、するわけねえし。ほんと、尊敬してるって」
へらへらしつつ両手をぶらんぶらんさせている雅也の動きを制するように「わかった、わかったから」と大悟は言ったあと、「よし、じゃあ、えっと、雅也？」と初めてその名前を呼んだ。雅也の目がぱっと輝いた。
「はい」
「勉強しよう、一緒に、ここで」
「ここで？」
大悟は、手にずっと持っていた英語の辞書を掲げた。とても尊いもののように。
「これを、頭から全部覚える」
「え、まじ？　辞書だよ、全部？」
「そう、全部」
「そんなの、おれにはできないよ」
「人は裏切る。しかし、身につけたものは己から離れず、身を助ける」
「は？」
「これ、僕のおじいちゃんが生きてるときに教えてくれたこと」
「まじか。重っ。大悟のおじいちゃん、なんかあった？　そんなこと言うなんてさ、ぜったい、誰かにものすごい裏切られ方したってことだよね」
「さあ、わからない」
「何も聞いてないの？」
「聞いてない。なんか、聞いちゃいけないような気もしたし」
「そっか……」
「おじいちゃんも、僕が泣いてても、c根掘り葉掘り訊かなかった。だから、僕もおじいちゃんの昔のことを訊かなかった」
「なんか、それ、いいな」
大悟は誇らしい気分になって、大きく息を吸った。
「だからこそ、僕にわざわざ言ってくれたことは実行しようって思った。おじいちゃんが言った通り、毎日こつこつ覚えたものは、忘れない。役に立ってるって、わかる」
「……みたいだね。やっぱすげえな、大悟。他のやつらとは全然違って、考え方に筋が通ってる。おじいちゃんゆずりだったんだな」
D大悟は、まあね、と応えるような笑みを浮かべた。
次の日から、二人は帰宅部の活動として、放課後はこの公園で待ち合わせをすることにした。同じ学校なんだから一緒に帰宅しようと雅也が提案したが、大悟は一人で歩く方が好きだったのであっさり断った。だが雅也は放課後、大悟の教室にやってきて、やっぱり一緒に帰ろうよ、と誘ってきた。「いやだ一人で歩く」と大悟はきっぱりと言い、雅也に背を向けてさっさと教室を出た。雅也の声が後ろから聞こえてきたが、大悟は声から逃げるように振り返ることなく足を速めた。
濃紺の制服を着た二人は、部活動へ向かう体操着の生徒たちの間をかきわけながら廊下を進んでいった。昇降口で靴を履き替え、校庭を横切り、校門を抜け、住宅の並ぶ通学路に出た。早足の大悟は笑っていた。追いかける雅也も笑っていた。二人とも笑いながら、少し息が切れていた。
街路樹の新緑が、初夏の陽をまぶしく照り返している。二人の髪に、顔に、背中に、鞄に、まだらの木漏れ日が降りかかる。E目指す公園は、あともう少し。
（注1）邁進……恐れることなく、前に進むこと。
（注2）ノルマ……ここでは、大悟が自分に課した覚えるべき英単語の数のこと。

問1 ――線部a～cの本文中での意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「破顔した」
① 真剣な顔つきになった　② にっこりと笑った
③ 表情をひきつらせた　④ しかめっ面をした

b 「流布している」
① もれ出している　② 知られている
③ 広まっている　④ 定説になっている

c 「根掘り葉掘り」
① 隠しごとを調べるように　② 大きな声でやかましく
③ 怒って、問いただすように　④ しつこく、細かいところまで

問2 ――線部A「身につけたものによってすでに助けられていた」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切な言葉を本文中から抜き出して、初めと終わりの五字を書きなさい。

問3 ――線部B「よかったあ！」とありますが、少年はこのときどのような思いでいますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

① 大悟から友達と思われていないのではないかという不安感がうすれ、安堵している。
② 一緒に活動したことを大悟が隅々までしっかり覚えてくれていたので、感激している。
③ 自分が大悟の記憶に残っていたのが確認できたので、天にものぼる気分になっている。
④ 大悟がウソでも自分を覚えていると言ったので、会話を楽しく続けようとはしゃいでいる。

問4 ――線部C「へえ……」とありますが、このときの大悟の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

① 少年とどこかで会ったことがあるのだろうかと、記憶の中から当時を思い起こそうとしてもこれといったものが浮かんでこないので、少年への対処の仕方がわからずに困っている。
② 少年の相手をするのがめんどうで「覚えてるよ」と伝えたが、そのうち演技を続けるのが難しくなり、これからどう応じるべきかと思案するとともに少々の焦りも感じている。
③ 少年と確実に会ったことがあるのに、その記憶にたどり着くことができないもどかしさで苦しくなるとともに、少年に好ましい対応ができずに申し訳なく思っている。
④ 少年の記憶を掘り起こそうとするが、いわゆる既視感というものであったことに気づき、いまから覚えていないなどと言い出すことができず、安直なことを言ってしまい後悔している。

問5 ――線部D「大悟は、まあね、と応えるような笑みを浮かべた」とありますが、大悟がこのような表情になったのはなぜですか。七〇字以上、七五字以内で説明しなさい。（句読点は一字とします。）

問6 ――線部E「目指す公園は、あともう少し」とありますが、これはどのようなことを表現していると考えられますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

① 大悟が、自分をしばりつけていたおじいちゃんの考えを捨て、雅也と共に新しい世界へとようやく歩き出せそうになっていること。
② 大悟が直向きに勉強に励んでいると、自分を慕う雅也との繋がりができ、放課後に共に勉強することを、大悟が楽しみに思っていること。
③ 大悟は雅也という友達ができたことで、おじいちゃんを裏切ったような気持ちになっているが、それを乗りこえたいと思っていること。
④ 大悟は雅也と仲良くなったことで、今まで力を入れてきた勉強よりも大事な別の何かを、雅也と新しく始めたいという気持ちでいること。